第 19 号
発　行
筑波山がまの油売り口上研究会

「がま研」世界に発信！

潜在視聴者ウン億人？

「つくばね会」のメンバー碓井賢さんと萩原義夫さんが、続けてテレビ出演

「・・・と言ったってぇー、そこにもある・ここにもある、というものたぁーモノが違う」

ＮＨＫやＴＢＳの視聴者何百万、何千万人とは桁が違う。こちらは潜在視聴者がウン億人。龍ケ崎市を拠点に活動しているＮＰＯ法人「茨城県南生活者ネット」が運営している「蛙蛙ライブ（かわずあらいぶ）」というインターネットテレビ。世界中の人が観ようと思えば、いつでもどこでも観ることができる。

碓井さんは「がま口上」を、萩原さんは「紙芝居」を熱演。

碓井さんは、「お客がいないので、掛け合い、アドリブがきかずやりにくかった。」と感想を述べておられた。「スタジオは、ライトは熱いが、雰囲気は冷たい。」とも。

萩原さんの普段のしゃべりは、歯切れのいい「べらんめい調」。

以前、「萩原さん江戸っ子ですか？」と聞いたことがあるが、「俺は山梨」と仰っていた。ところが紙芝居になると、歯切れの良さを残したまま口調がとてもやさしくなる。「ねずみの嫁入り」などのお話しを聞いていると、ついつい引き込まれてしまう。

実は、筆者も脇役で出演しているが、あがってしまい何をしゃべったか覚えていない。それにひきかえお二人ともいい度胸をされている。堂々と演じていらした。世界中からファンレターが来るかもしれない。

今回はインターネットテレビだったが、碓井さん、萩原さんは、ＮＨＫやＴＢＳなどからの出演依頼には、いつでも応じるはず。「ご担当の方ご連絡お待ちしております」。

お二人の映像をご覧になるには、http://www.ik.-cn.tv/kawazu.html へアクセスして「映像庫」をクリックしてください。

碓井さんは二〇〇九年六月二十六日、萩原さんは七月二十四日放送分です。

かわずあらいぶ　検索　でもＯＫです。

（近藤　博　記）

二〇〇九年の夏体験！

市村文子

この夏、私はやっと、がま口上デビュー五周年そして還暦と、喜びの年を迎えた。（諸先輩の前で大変おこがましいのですが、何とか、一人歩きができるようになったかなぁと、一息！）　そこで、お世話になった先輩のお手伝いでもできる機会があれば・・・と願っていた矢先、会の池田さんが、「坂東市・劇団夢　おしの公演」の前座に、がま口上で出演するとの話を聞き、拍子木打ちで、応援させてもらうこととなった。

まさしく、これトントン拍子♪。早速夏休みに合わせ、何度か二人で練習を重ねるうちに、呼吸もバッチリ！いよいよ、八月二十二～二十三日の公演本番となった。

会場は大入り満員のお客様、限られた八分間のがま口上に全力をかける池田さん。その表情は凛として、緊張感を見せることなく、「さあさあ・お立会い～」と、滑らかな名調子で始まり、観客を笑いの渦に巻き込む余裕にも満ちていた。私は舞台の袖で、口上に合わせ、床ならずまな板の台に、拍子木をドドンドンと叩く。音響効果担当の手打ち業師にも一段と気合が入った。（プロ顔負け？）　こうして舞台は大成功。

同時に、芸ごとの世界を、興味津々に横目で「チラリ・チラーリ」と、見ることもできた。秒刻みの中で動く舞台の表裏、光と影、共同作業のなかでの一人一人の役割と、責任の上に立つプライド（誇り）が、とても大きく光って見えた。

こんな、二日間の大役を果たし、いよいよこの夏も終盤と言いたいが、今年は違う。

ここに来て衆議院総選挙・県知事選に芸能界覚せい剤事件・新型インフルエンザの広がりと、連日続く熱い報道に加わり、私的には、八月十六日のフラワーパークでの出番も無事終ったのだが、二十九日の「祭つくば　ひょっとこ踊り」が待っている。私のショータイムはもう少し続きそうだが・・・

さて、さあて、夏から秋へと、いつ、どんな秋の風に変わるのだろうか。

平成２１年度
がま口上講座のお知らせ

恒例のがま口上講座が下記の日程で開催されます。興味をお持ちの方が周りにおられましたら、是非お声掛けください。

開催日：①　９月２６日(土)
②１０月１０日(土)
③１０月２４日(土)＊
④１１月　７日(土)　　計　４回
時　間：午前１０時～正午(＊24 日のみ午後１時～３時)
場　所：土浦市立「小町の館」
定　員：３０名
受講料：無料

非日常に遊ぶ

丸山　義雄

私達、がま研メンバーの方々は「がまの油売り口上」を演ずることで日常の生活と違った空間に身を置いて楽しんでおられるのではないでしょうか。

私ががまの会に入会した動機もそうした面がありました。公衆の面前で大声を張り上げ、がま口上を述べることで別世界に居る自分を楽しんでいます。

ところで、もう一つこうした世界がありました。各種撮影のエキストラに出演するのです。時代劇が多いので、まず化粧を施してもらい、カツラをつけ、衣装は役割にしたがって着付けをし、小道具もあてがわれ、その時代の人物に仕立て上げられます。人数も数十人単位で、侍・町人・足軽などの姿形になると、もう完全に設定された時代に浸ることができます。撮影なので、決められた指示に従って行動する必要があるため自由気儘な動きはできないものの、その時代の雰囲気を十分楽しめます。季節により暑い時期、寒さに震える時期もあるが、その分往時の人々の暮らしぶりを偲ぶことになります。ただ、約束事があります。

①俳優さんとの接触は挨拶のみで話しかけやサインの要求はしない。

②自分の衣装姿のカメラ撮影は控室内のみでセットではしない。

③撮影の進行中は待機し自由行動はできない。

などあるものの、設定時代を楽しみ遊ぶことができます。

私が参加した撮影は、昨年の大河ドラマ「天璋院篤姫」のお輿入れ時の長持ちかつぎ、「かげろうの辻」での廃寺の賭場に出入りする商家の手代、今年の大河ドラマ「天地人」で直江兼続の上洛を見物する町人役などがあります。ただ、放映されたときはいずれのドラマにも影も形も映ってはおりませんで、自分が楽しんだだけでした。このエキストラ参加は

①つくばみらい市の“エキストラの会”に登録する。

②インターネット又は携帯に“会”から撮影募集があり、日時があえば応募する。

③“会”から応募決定の通知が来て決まる。

（現在、登録者が多いので選に漏れることもある。）

以上、こうした遊びの世界もあります。

脳トレタイム　～ナンプレに挑戦～

年老いても使い方次第で、脳は十分活躍できることが実証されています。

世界中で人気があり、大人から子どもまで楽しめるパズル。既に愛好されている方も多いと思います。未経験の方はこの機会に挑戦してみてください。脳も鍛える“かわら版”です。

ルール①：縦横各９列に１～９の数字を１つずつ入れます。
ルール②：太線で囲まれた３×３の９マスにも１～９の数字を１つずつ入れます。
ルール③：各列、各マスに同じ数字は入りません。

初級用です。中級者はタイムに挑戦しましょう

		3			8			4
	8			4		5	1	
6		1	7				9	
		7		1				6
	2		5		4		7	
3				6		2		
	6				3	1		2
	1	8		2			4	
7			4			9		

世界自然遺産 屋久島を歩く

佐藤貞弘

昨秋、洋上アルプスと言われる屋久島を家族と訪れた。目標は縄文杉であったが天候と体調を考慮し、白谷雲水峡から太鼓岩へ登り、安房岳、宮之浦岳、永田岳の山々と縄文杉のある安房川上流の屋久杉原始林を眺めて一日を過した。

ここまでの道程にも固有名をもつ屋久杉が多数あり巨木の鼓動を感じることができるほか、白谷雲水峡には常に水蒸気が漂い、周囲の木々や大地を苔で包む登山道は「もののけ姫の森」を彷彿させる癒しの空間となっている。

この屋久島、平成五年に白神山地とともに日本で初めて世界自然遺産に登録されて以来、観光客が増加していると聞いて来たが、とにかく多かった。また、鹿や猿は保護されているせいか、林道や登山道近くのいたる所で人目を気にせず平然と行動するのには驚いてしまった。

私が地図作成のため、始めて訪れた昭和四二年の島人口は約三千名で、鹿や猿も同じくらいの数と言われ、雨の山道で鹿と偶然遭遇するくらいであったのに、保護のおかげで大分頭数が増えているようだ。逆に少なくなったのは山蛭で、当時の原始林の山道ではピクピク動いて獲物を待っていたが、今回はヤクスギランドの仏陀杉付近で数匹見ただけであった。ちなみに現在の島人口は約一万四千人とのことである。

今、屋久島は山中における人間の排泄物の処理問題に直面し、今後、自然とどう共生していくべきか「屋久島憲法」を制定して、その維持活動と保護の拡大を図っているが、一番の問題は、来島者がいかに現地を理解し行動するかにかかっていると思われた。

もののけ姫の森　「こだま」が見えそう

二足（？）のワラジ

3月で仕事を辞め、時間ができたこともあって「暇なんでしょ？」とあれこれお仕事を仰せつかったり、手を出したくなったり。「それは何足目のワラジだい？」という家族の言葉も聞こえない振りで、何足かのわらじを編み始めた。

布草履は結構上手に編めるのです（会員の皆さんも、何足ものワラジを履いたり持ったりしておられる。片方だけのものや、つま先だけのもの、擦り切れて何度も編みなおしたもの等など。不思議なもので、履き心地の良いものはくたびれても大切に履き、どこか無理があって痛いものは、自然に物置の隅に追いやられる運命となる。

ムカデに何本の足があるのか数えたことはないが、旅に出るムカデがワラジを履くのに難儀する話を聞いたことがある。落語だったか、昔話だったか？自分はともかく皆さんのことをムカデに例えては失礼かもしれないが、何足ものワラジを履いて一生懸命走る姿はムカデ競走のようで笑える。履けるワラジがあることに感謝し、遠くまで歩けるものが手元に残るよう歩んで行きたい。

ムカデ百足（ももたり）

編集後記

日差しの少ない夏に米の作柄を案じたものの、頭を垂れ次々に刈り取られる景色にホッとしております。身の回りの小さな出来事など気軽にお寄せください。次号の原稿締め切りは二月です。

編集子